

浅古の古墳探訪(2)

以前は秋殿東古墳と呼ばれていた

④こうぜ1号墳(西石室)



(浅古)

墳形	大きさ	埋葬形式	築造年代	備考
前方後円墳	全長約50m	両袖式 横穴式石室	6C後半～末	

こうぜ1号墳の後円部と考えられる墳丘西側部分に位置し、墳丘の南側に開口する両袖式の横穴式石室で、石室内には東石室同様、多量の流入土が堆積している。調査前までは、秋殿南古墳のすぐ東側の丘陵上に位置することから「秋殿東古墳」と呼ばれていた。

現況で全長10.9m、玄室幅は奥壁側で2.9m、前壁近くで2.6mを測り、玄室長は5.4m、玄室高約2.6m、羨道長5.5m、羨道幅1.2m前後、羨道高約0.6m。壁面は比較的大型の石材で構築され、明確な加工痕は認められないが、平滑面を内側に向けて造られている。玄室奥壁が3段積み、玄室側壁は4段ないし5段積みで東石室と共通性が見られ、同一の工人集団により、ほぼ同じ時期に造られた可能性が高いが規模的には東石室より若干大きい。

石室内の遺物は一切確認されていないが、石室の構築方法が近くの赤坂天王山古墳と概ね似ている事から6世紀後半～末頃に位置付けすることが出来る。



鳥見山東麓の隠れ古墳!

⑤伊丹宮古墳



(浅古)

墳形	大きさ	埋葬形式	築造年代	備考
円墳	直径約20m	両袖式 横穴式石室	7C前半頃	

鳥見山から南に向かって伸びた尾根の端部の西斜面にある両袖式横穴式石室を持つ径約20m(奈良県遺跡地図では径11m)の円墳。戦前の書籍には掲載されているが現在は、すっかり忘れられた存在。1958年小島俊次氏の『古墳-桜井市古墳総覧』から引用すると

「南にむかっのびてきた尾根の端部、西斜面に、ほぼ南半が破壊された円墳がある。封土の大きさは径約20m、高さ約5mと推定できるものである。内部構造主体の横穴式石室も割石を積み上げられたもので、南に向かって開口する。羨道部はほとんど破壊されているが、玄室は長さ約3.7m、幅約2m、現高さ2.5mで、羨道は約1mの長さが残るのみである」とあり、この時と状態は変わらないと思われ、羨道部が半壊し、玄室の天井部分に隙間が空いている箇所があるが状態としてはまずまず。比較的巨石を用い玄室部は側壁3段、奥壁は2段、羨道部は半壊し、土砂が流入しはつきりしないが2段積みと思われる。なお、奈良県遺跡地図では14B-184とされている。築造年代は石室の構造から7世紀前半頃と考えられる。



伊丹宮古墳

「磚積式」古墳を見るなら

⑥舞谷2号墳

(浅古)

墳形	大きさ	埋葬形式	築造年代	備考
長方墳	10.6×9m	磚積式 横穴式石室	7C中頃	

舞谷古墳群は、鳥見山の南山麓の小さな尾根毎に、1基づつ築かれた東西に並ぶ、5基からなる古墳群である。全て長方墳で、石室は、榛原石の板石をレンガ状に加工し、漆喰で固めながら積み上げて造られた「磚積式」の石室である。唯一見学できる2号墳は、墳丘の大きさが東西約10.6m、南北約9m、高さ約2.5mの長方形で、墳丘の中央部に南に開口する横穴式石室をもち、大きさは、全長約4.4m以上、玄室長2.4m、幅1.35m、高さ約1.7m。羨道は半壊し、現状は、長さ1.7m以上、幅1.1mとなっている。石室構造は「奥壁」と左右の側壁から少しずつ持ち送り、小型の板石で覆い天井の断面は家形の寄棟造りになっている。漆喰は、かなり剥落しているが、元々は全面に塗布されていたと思われる。

尾根に、連続して築かれた他の4基も、磚積式石室を採用した、同一集団による墳墓で、築造時期は7世紀中頃と考えられる。磚積式石室は桜井の粟原谷周辺や宇陀地域に集中して見られる石室様式である。

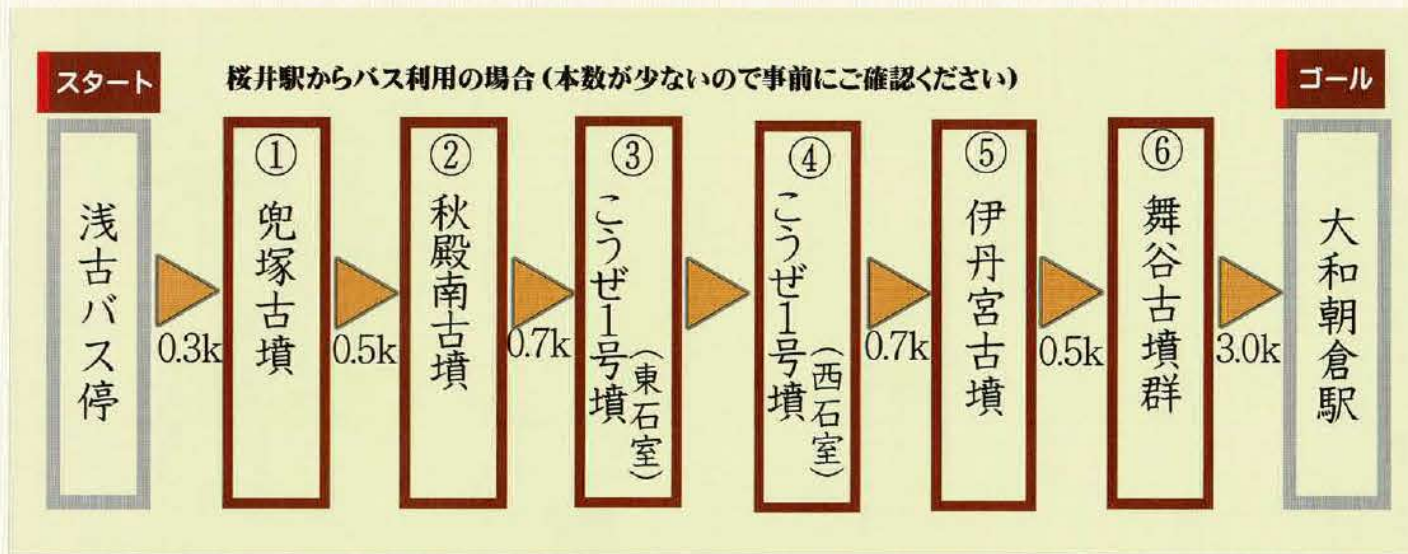


あさご 浅古周辺の古墳探訪

～体験しよう！桜井の古墳ワールド！～

桜井市市街地の東南部になだらかな山容を見せる標高245mの鳥見山は、神武天皇、鳥見霊時の伝承と共に、山頂を中心として放射線状に広がった尾根の先端に多くの古墳が築かれています。今回ご紹介する鳥見山の南麓には浅古から忍坂にかけて東西方向に伸びる小規模な谷が存在しており、桜井南部の磐余地域と粟原川沿いの忍坂へ抜ける古代の交通路があったと考えられています。珍しい磚積式石室を持つ舞谷古墳群のうち唯一見学が出来る舞谷2号墳、古墳マニア以外にはあまり知られていない伊丹宮古墳、前方後円墳に2基の石室を持つ、こうぜ1号墳、これらに加え阿蘇ピンク石石棺で知られる兜塚古墳など特徴のある古墳が沢山存在し、ほとんど石室の中に入って見学できるのもコースの特徴です。古代のタイムカプセルともいべき古墳の数々をこの機会に体験いただければ幸いです。

モデルコース(全行程約6k)



コースについて

鳥見山(標高245m)は山頂を中心に複数の尾根が放射線状に広がり、それぞれの尾根の稜線上や先端に多くの古墳が築かれています。今回ご紹介する南麓に位置する各古墳は、浅古集落から忍阪へ抜ける谷道に築かれ、石室構造など屋根単位での独自性が見られ墓域のあり方を考える上で非常に興味深い地域です。ではコース順に各古墳の見所をご紹介します!

- ①兜塚古墳…石棺の石材は遠く離れた熊本県宇土半島産の阿蘇溶結凝灰岩(通称阿蘇ピンク石)で、石棺材としての使用例は九州以外では全国で15例ほどしかない貴重なものです。(この古墳のみ鳥見山とは別の丘陵に位置しています)
- ②秋殿南古墳…「岩屋山式石室」のプロトタイプとも言える石室で、奥壁は2段積み、羨道部は両壁が3個~4個の巨石1段で構成され、岩屋山式と共通するところが多い大型巨石墳です。
- ③こうぜい1号墳…複数の石室を持つ前方後円墳として、畿内で7基、大和で3基しかない珍しい石室構造を持つ古墳です。2基の石室が隣接して築かれ、両石室とも開口部は狭いですが石室内に入っただけの見学が可能です。
- ④伊丹宮古墳…余程の古墳ファン以外は初見の古墳かと思えます。そんな山奥の難所にあるわけではないのですが、見つけるのに苦労するかも知れません。しかし見つけた時の喜びは古墳ファンしか味わえない難所古墳ならではの感動の一瞬です。
- ⑤舞谷2号墳…榛原石を漆喰で固めた全国でも十数例しかない、磚積式石室の代表格として花山塚古墳と共に知られています。舞谷古墳群として調査は1984年~85年に3号墳、4号墳を中心に行われています。

古墳への興味は、まず現地に立つことから始まります。お寺や仏像には、それぞれの言い伝えがあり、多少伝説めいたものがありますが古墳には殆んどありません。探索しながら無言で歴史を語りかける古墳たちのメッセージに耳を傾けましょう。

古墳探訪…その前に

お出掛けの前には以下の事に留意され古墳探訪をして頂くようお願いいたします。

①マナーを守ろう!

- ・今回、ご案内の古墳の多くは横穴式石室が開いており、石室内に入り見学する事ができます。しかしながら古墳は文化財であると同時にお墓という事を忘れてはなりません。近くに所有者の方、あるいはご近所の方がおられれば、お声がけしてから入ってください。多くは、民有地ですので所有者の方に迷惑をかけないよう配慮願います。
- ・古墳の石材や遺物を持ち帰ることは法律により罰せられます。

②安全に!

場所によっては、雑草や熊笹が生い茂り、道なき道を探索する場合もあるかと思しますので、くれぐれも安全対策の上、お出掛けください。(このコースでは軽登山靴、ウォーキング用の杖、軍手、帽子、懐中電灯、GPS付の携帯電話等などの装備をおすすめします)

古墳探訪ガイド(1)

兜塚古墳



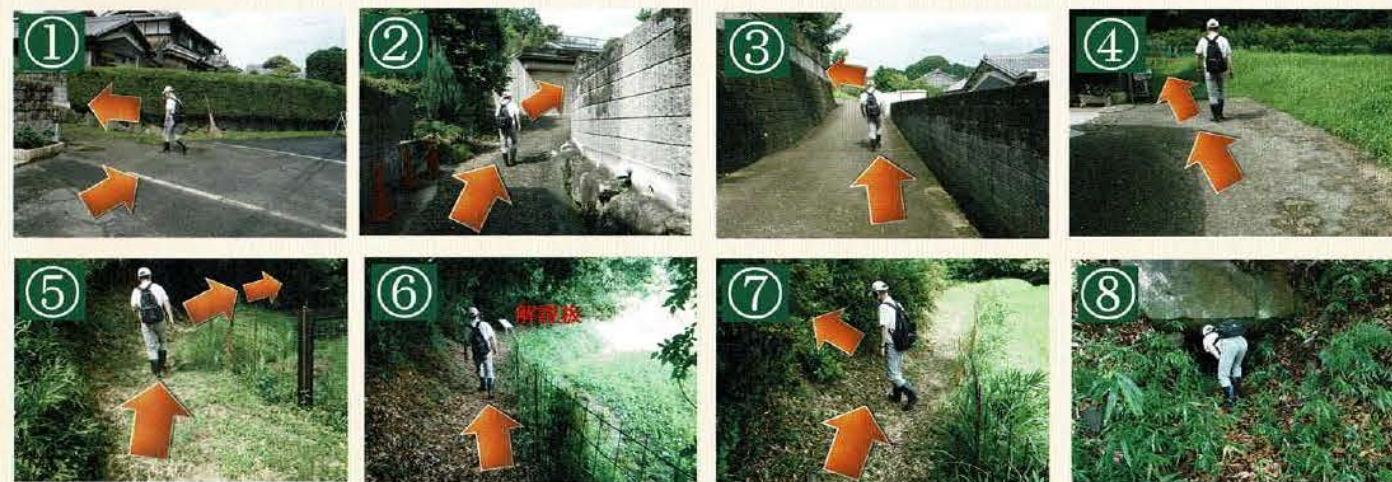
- ①奈良交通バスの浅古(あさご)停留所で下車し、バスの進行方向に沿って緩やかな坂道を上がっていきます。
- ②少し進んで空地の角を兜塚古墳のある右に曲がります。
- ③ほんの少し歩くと左手の上に兜塚古墳が見えてきます。
- ④写真のようにフェンス沿いにある細道を進みます。(民家の方に行かないようにご注意ください)
- ⑤すぐに擁壁の合間に、兜塚古墳に上るコンクリートの階段があります。
- ⑥階段を上ります。
- ⑦途中から写真のように墳丘を段切りした小道となり、滑りやすいので注意が必要です。
- ⑧上った所が後円部です。すぐに兜塚古墳の阿蘇ピンク石の石棺が見えてきます。

八坂神社境内古墳



奈良県遺跡地図ではI4D-0090とされているのがこの古墳です。尾根端に築かれた径15mの円墳で南に開口する横穴式石室を持つ古墳です。今は見る影もなく、玄室の奥壁と西壁の一部を残すのみで、跡地には灯籠や歌碑が立ち並び、これが古墳と気が付く方は少ないと思います。残された石材から石室規模は、玄室長は約4.3m、玄室高さは2m以上、羨道長は5m以上あったと思われます。

秋殿南古墳



- ①浅古の交差点から忍阪に向かう県道を東に進み、民家の塀を左に曲がり細い舗装道路に入ります。
- ②直進し道なりに沿って右に曲がります。
- ③そのまま進み、道なりに左に曲がります。
- ④舗装道はここまでで、ここから農道に入ります。もうまもなくです。
- ⑤山裾に沿って右側に曲がります。
- ⑥すぐ左手に秋殿南古墳の解説板があります。(解説板の右上に古墳があります)
- ⑦解説板から2~3m進み雑草の少ない場所を探し上るとすぐに開口部が見えてきます。
- ⑧これが秋殿南古墳の開口部です。

古墳探訪ガイド(2)

浅古の古墳探訪(1)

こうぜ1号墳



古墳への道はありません。足場が悪いので注意しながら探索ください。(雨天時は避けた方がいいでしょう)

- ①桜井中学校前の交差点を左折し、鳥見山の山裾の方向に進みます。
- ②突き当りの少し手前を擁壁沿いに左に曲がります。
- ③約20mほど進むと竹藪が見えてきます。この上の丘陵に「こうぜ1号墳」があります。
- ④この矢印に沿って、足元に気を付けながら上って行きます。
- ⑤所々にある目印の赤いテープを参考に頂上近くまで上ります。
- ⑥これが、こうぜ1号墳の東石室の開口部です。
- ⑦西石室は、左手約20mの所にあります。(浅古周辺古墳マップの「こうぜ1号墳墳丘図」を参考にしてください)
- ⑧これが西石室の開口部です。

伊丹宮古墳



距離的には短いですが古墳への決まった道はなく、探すのが難しい古墳のひとつです。浅古周辺古墳マップの「伊丹宮古墳位置図」でおよその場所の見当をつけてから探索されるといいでしょう。

- ①桜井中学校前の道路から写真の丘陵を探し道なき道を進みます。
- ②上りやすい場所を探し、丘陵に入りマップを参考に探します。(足元に注意ください)
- ③丘陵の入口から順調に行けば約5分ぐらいで伊丹宮古墳の墳丘が見えてきます。
- ④墳丘に沿って南側に回ると開口部が見えてきます。楽に入れますので入室がおすすめです。

舞谷2号墳



道路脇にあるの階段(約60段)さえ見つければ楽に探索可能な古墳です。この周辺は舞谷古墳群という5基の古墳に13石室を持つ貴重な古墳群として知られています。但し発掘調査された古墳(3・4号墳)は埋め戻され現在見学出来るのはこの2号墳だけです。

- ①忍坂に向かう県道の道路脇に白いフェンスの階段があります。
- ②この階段を上ります。
- ③それらしき道がありますので直進します。
- ④道なりに進むと舞谷2号墳に到着です。

阿蘇から運ばれた石棺を持つ

①兜塚古墳

(浅古)



墳形	大きさ	埋葬形式	築造年代	備考
前方後円墳	全長約50m	竪穴石槨	5C末~6C初	市史跡

兜塚古墳は北西に伸びる丘陵の先端部に位置する前方後円墳で全長約50m、後円部径約28m、前方部幅約25mで墳丘は四周が削られ急傾斜となり、どの程度原形を残しているかは不明。前方部を西に向け、後円部の埋葬施設は確認されていないが、前方部には河原石を用いた一種の磚槨状の竪穴石槨(長さ約3.7m、幅約1.4m)があり、床面に粘土を敷詰めた上に刳抜式家形石棺を納めている。石棺の蓋は蒲鉾形で長辺に縄掛突起が2個づつ、やや上向きにつく古い様式のもので石材は被葬者の権威を象徴するかの如く、熊本県の宇土半島で採石される安山岩質溶結凝灰岩(通称阿蘇ピンク石)が使われている。盗掘穴から懐中電灯で棺内を覗けば、より赤みを感じられる。

出土品としては碧玉製管玉・琥珀製鬘玉・銀製空玉・小玉・鉄鏃などがあり、5世紀末から6世紀初め頃の築造と考えられる。この時代は前方後円墳が縮小化する時期で、全長50mとはいえ、それなりの規模であり王権をささえた重要人物の可能性も考えられる古墳で桜井市の史跡に指定されている。

岩屋山式のプロトタイプの石室

②秋殿南古墳



(浅古)



墳形	大きさ	埋葬形式	築造年代	備考
方墳	一辺約26m	両袖式 横穴式石室	7C前半頃	

鳥見山南麓の、一尾根の南西斜面に築かれた、一辺約26m、高さ約5mの方墳で、南に開口する両袖式の横穴式石室は墳丘の中心軸からやや西よりに築かれているが、これはより大きく見せるための視覚的効果を狙ったものかも知れない。石室の石材は花崗岩で、一部切石を使用しており、全長11.2m、玄室長4.5m・幅2.3m・高さ2.4m。玄室の石積みは基本的には大型の石材を2段積みし天井部との隙間に小石材を入れて調整、羨道部の側壁も巨石の1段で構成され、いわゆる「岩屋山式石室」と共通する所が多い。平面プランは必ずしも一致しないが、横穴式石室の時代の流れの傾向からみて、岩屋山式石室の一段階前の型式といえよう。

副葬品や棺等は不明であるが、石室の特徴から7世紀前半代の築造と考えられている。西の阿部地区と共に周辺は飛鳥から東国への主要街道であり、7世紀に入って続々と大型巨石墳が造られ、その多くが方墳という特徴を持つ。

古墳探索マニアに人気の

③こうぜ1号墳(東石室)



(浅古)



墳形	大きさ	埋葬形式	築造年代	備考
前方後円墳	全長約50m	両袖式 横穴式石室	6C後半~6C末	

こうぜ古墳群は、鳥見山南麓から派生する、尾根の先端に築かれた古墳群で1号墳は、全長約50mの前方後円墳、2号墳、3号墳は小規模な円墳の可能性が高い。1号墳は、複数の石室を持つ前方後円墳として、畿内で7基、大和で3基しかない、資料的価値の高い古墳で、2基の石室が隣接して築かれている。東石室は前方部と考えられる墳丘の東側部分に位置し、墳丘の南側に開口する両袖式の横穴式石室。現況で全長は9.9m、玄室部は幅(奥壁)2.5m、長さ4.7m、高さ2.5mで羨道部は長さ5.2m、幅1.4m前後、高さ0.8m。壁面の石材は西石室に比べやや小さいが玄室の2段目には巨石が使われている。石材には明確な加工痕はなく、西石室ほど平滑化されていない。玄室部まで土砂が入り込んでおり、本来の玄室高は3mを超えるものと考えられている。壁面構成は奥壁が3段、側壁は4段ないし5段で構築されている。遺物としては土器片が4点確認されているが、遺構に伴うものではなく、時代を特定できるものではない。築造時期は石室の形態から、前方後円墳の最終末期の6世紀後半~末頃と考えられる。